



イケン先生の『恐縮ですが…一言コラム』

第 587 回 「相対性の罨」 ～意識調査の落とし穴

2014.7.27

現在の仕事に対するやりがいを探ったところ、「やりがいを感じている」人が 53.7%、「やりがいを感じていない」人は 46.3%となったことが、日本能率協会の「働き方に関する意識調査」で分かったようだ。調査結果からは、仕事にやりがいを感じている人は「納得のいく収入が得られている」こと、勤務先に愛着を感じている人は「給与が高い」ことをあまり重視しておらず、賃金の高さがそのまま、やりがいや勤務先への愛着に比例するとはいえない…と結論づけている。

「なるほど」となんとなく読み過ごしてしまうこの手の調査、よくよく考えると、実に不思議な調査である。日本人の好きな「労働美観」、つまり「仕事で大事なものは、おカネよりもやりがいだ。」という価値観が先に在りきで、大仰な調査をしなくても、行き着くところは最初から見えているような気がする。

チョイと気になることは、いったい何をもって「やりがい」と感じているのだろうか、そんな疑問である。例えば、自分の仕事に疑問をもっているとする。しかし、周りの人の話を聞くと、「私の仕事なんて、やりがいどころか、ストレスしかないよ」といった話ばかり耳にする。すると自分は「私は案外、恵まれていて、仕事のやりがいを感じながら働けている方なのかな」と思ってくるのが道理だろう。

一方逆で、「私の仕事はとつても、仕事のやりがいがあるよ」「毎日の仕事が楽しいわ」という声が多かったら、私の仕事は、あまりやりがいのない仕事なのかもしれないと思うことになるかもしれない。両者とも、自分の仕事自体は同じであるにもかかわらず…である。

「自分の今やっている仕事は、やりがいのある仕事なのだろうか？」すらも、時に、周りの皆との比較に頼らなければ、認識出来ない。私達の生きる現実の世界は、比較によって物事が認識される相対性の世界だから、「やりがい」も確固たる自信の信念ではなく、人との比較によって生まれてくる。「私の方が、まだ、マシだ」…と考えた瞬間、本質的、客観的テーマは、この上もない曖昧な感覚論へと変貌する。

この現象を「**相対性の罨**」と呼んで、中々本音が見えてこない実例だ。

マスコミによる世論調査の結果をみれば一目瞭然、意識調査の場合、アンケート票の設計段階でいかようにでも結果を誘導できる。特に自己主張が苦手な日本人的感性、自分の明確な考えを持ちにくいテーマにおいては、「赤信号、みんなで渡れば怖くない」的感覚が無難となる。みんなも、そう思っているからひと安心が、一番心地良いのである。

であれば、狙いとするイメージの醸成は、実に容易(たやす)いことかもしれない。

「やりがい」調査同様、平和より戦争を好む人種がいるはずなのに、同じ土俵で無理やり比較するナンセンスさは、「相対性の罨」を捻(ひね)った、稚拙なインテリ論理の好例であるかもしれない。

良否はともかく、世論を先導する大きな力は、こんな心理を利用し発揮されていくのだろう。